

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

中里唯馬 ファッションデザイナー
Yuima Nakazato / Fashion Designer



CREATOR INTERVIEW

No

118

中里唯馬 Yuima Nakazato

ベルギー・アントワープ王立芸術アカデミーを日本人最年少で卒業し、欧州最大の学生コンテストのインターナショナル・タレント・サポート (ITS) で2年連続受賞。2009年に自身のファッションレーベル「YUIMA NAKA-ZATO」を設立。2016年7月、日本人として史上2人目、森英恵氏以来12年ぶりとなるパリ・オートクチュール・ファッションウィーク公式ゲストデザイナーのひとり選ばれ、コレクションを発表。その後も継続的にパリでコレクションを発表し、テクノロジーとクラフトマンシップを融合させたものづくりを提案している。

No

118

中里唯馬 ファッションデザイナー

YUIMA NAKAZATO / Fashion Designer

クリエイターインタビュー

『都市開発とあわせて衣服の循環システムを構築する』



ファッションデザイナーも街づくりの一員に。

published_2020.07.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

パリ・オートクチュールコレクションで活躍する、唯一の日本人ファッションデザイナー、中里唯馬さん。世界的アーティストの衣装デザインを手がけた経験などを通して、一点物の衣服をより多くの人に届ける方法を模索しています。活動の原点にある思いや、服づくりにユニークなテクノロジーを積極的に用いる理由、近年のファッション業界の大きな潮流といえる「サステナビリティ」をどう捉えているのか、そして未来の都市と衣服のあり方についてお聞きしました。服と人、着る人とつくる人の理想的な関係を追求し続ける、ファッションデザイナーの哲学が見えてきます。

" 自分のための服 " を多くの人が着られる世の中に。

私はベルギーのアントワープ王立芸術アカデミーでファッションを勉強して、その後、東京に戻り、デザイナーとして活動を始めました。初期の頃、あるミュージシャン（ブラック・アイド・ピーズのボーカル、ファーギー等）の衣装をオーダーメイドでつくらせていただいた体験が、服づくりの原点になっています。ロサンゼルスに住んでいる方でお会いしたことはなかったのですが、似合うであろう服を想像しながらつくり、フィッティングの時に初めてお会いして着ていただきました。結果、とても気に入ってくださり、その後も同じ服を何回も発注していただいたんです。その一連のやり取りを通して、着る人のことを考えてつくる面白さに出会いました。サイズがぴったり合うということだけではなく、着る人のバックグラウンドや性格、どんなライフスタイルなのかまで想像してデザインをして、喜んでいただけた。そのプロセスが服のあり方として理想的で、多くの人がこういう服を着られるような世界になったらとても豊かだ、と思うようになったんです。

一方で世の中の多くの人が着ている服は、今のところその対極にあって、不特定多数に向けて大量につくられた服のほうが一般的といえます。サイズや着心地だけではなく、あらゆる意味でその人に合った服を着ること自体がかなり特殊で、世界でも限られた人だけの体験になっているわけです。これをより多くの人に届けるためには何をすべきなのか、という思いが私の原動力だったりします。

「手づくりの服」という意味では、お母さんが子どもにつくる服も一種のオーダーメイドで、すし、街の商店街にあるようなテーラー屋さんにスーツを仕立ててもらうのもオーダーメイドなので、昔から存在するプリミティブな手法ともいえます。デザイナーというつくり手と着る側が、近い距離感で服を生むような流れは、今は特殊なことに捉えられがちですが、そもそもファッションの原点にあるものです。それを新しい発想やテクノロジーなどと組み合わせることによって、多くの人がより豊かな服を受け取ることのできる世の中になっていくかもしれない。テクノロジーとひとことで言っても、最先端の技術もあれば、太古から受け継がれている技術もあります。こうしたヴィジョンを実現するために、ありとあらゆるテクノロジーを組み合わせたいという思いで、古今東西のテクノロジーをリサーチして情報を集めています。

着物とテーラーリングの技術を組み合わせた、未来の服。

ファッションの中だけでソリューションを探していこうとすると、視野が狭くなってしまうので、異業種の人とのコミュニケーションを大切にしています。最近特に注目しているのが、スパイバー社が開発している人工タンパク質によってつくられた、ブリュード・プロテインというマテリアル。この生地は自由に収縮をコントロールできるのが大きな特徴で、服に生かしたいと考えています。というのも、布は基本的に長方形であるのに対して、体は3次元の曲線なので、カーブを描いて裁断しないと体にフィットしませんよね。しかし長方形の布からカーブを切り出すと、必然的に無駄が出てしまいます。



ブリュード・プロテイン(BREWED PROTEIN)

山形県鶴岡市に本社を置くバイオベンチャー企業、スパイバーが研究開発している人工タンパク質素材。石油を使う合成繊維と異なり、微生物の発酵プロセスを用いてタンパク質を生成。サステナブルな素材として、アパレル分野を中心に大きな注目を集めている。中里さんは、「YUIMA NAKAZATO」2019-20 年秋冬コレクションにてスパイバー、ザ・ユージーン・スタジオとコラボレーションし、作品を制作。全ルックでブリュード・プロテインが使用された。

写真：SHOJI FUJII

一方で着物は、長方形の生地をそのまま使って体に合わせているので無駄が出ませんが、体からは離れた形になっています。カーブで体のラインに沿わせるのは、ヨーロッパのテーラーリングの技術ですが、ブリュード・プロテインの生地が動く性質を利用することによって、着物とテーラーリングの技術を組み合わせたとようなアイデアが実現できるのではないかと思います。現段階では、プログラミングによって生地の動き方を自由にコントロールできるようになっていて、その技術を使ってパリでコレクションを発表しています。今後はこの技術をさらに進化させてスケール化させて、より多くの人に届けることが目標です。

つくり手と着る人の距離を近づけることが、サステナビリティにつながる。

ファッションでもここ最近、サステナビリティの流れが大きく加速しています。新型コロナウイルスの影響で多くの人が困難な状況に陥り、人生にとって本当に大切なものを立ち止まって考える時間ができた。そのことで、サステナビリティの必要性についてより深く考えるようになったのではないかと思います。ただ、言葉やイメージだけが先行する場合もあって、サステナビリティは向き合うほどに奥が深く、難しいんですよね。そう簡単には答えを出せないのですが、その時にポイントとなってくるのは、想像することの大切さです。服はそもそもどこからやってきて、どこへ行くのか。店頭に並んでいる服を買って、着て、古くなったら破棄するという流れの中では、その前後がどうなっているのか、イメージしづらい。しかし実際は、その川上にも生地の生産や加工、縫製などいろんなステップがあって、場合によっては国や地域を越えてこうしたステップを経ていることもある。服を破棄した後も同様です。サステナビリティの概念を通して、着る側の人たちもそういったプロセスに意識を向け始めているのは、とてもいい潮流だと思います。

もちろん、ファッションデザイナーの視点から考えることもとても大事で、単純にサステナブルな素材を選んだから OK ということにはなりません。世界中にサステナビリティを意識したマテリアルはたくさんあるので、どれをチョイスするか見極める力がより求められるでしょう。さらにそのうえで、パターンを裁断する時に無駄が出ないか、加工方法が工賃と見合っているのかなど、生産プロセスを見直すことも大切。もっと言うと、デザイナーがどんなにいい素材を選んで、生産体制を整えて服をつくったとしても、その思いが消費者に伝わらず、短期間で破棄されてしまったら意味がなくなってしまいます。

服を大切に長く使ってもらいたい。たとえ繊細なつくりな服だとしても、大切に着ようとか、お直ししても長く着たい、と思ってもらえるものをつくりたい。そんな服をどうしたらつくることができるのか。その答えは、つくり手であるデザイナーと着る人の距離を近づけることではないでしょうか。一方的にこちらの思いやストーリーを伝えるだけではなく、着る側からも服をつくった人の顔が見えてくるような、双方向の関係性を築いていく。そんな着る人とのコミュニケーションが、デザイナーに求められているのだと思います。

中里唯馬 ファッションデザイナー

YUIMA NAKAZATO / Fashion Designer



published_2020.07.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

先人たちのフィロソフィーを抽出して、未来へつなげていく。

着物は世代を超えて長く着続けていくものですが、よくできていると思うのは、とてもシンプルな構造で、少しのお直しでいろんな体型に合うところ。サイズの問題がほぼないので、誰でも着られて、逆に言えば誰にも合わないようになっている。この発想が非常に未来的だと思います。サイズの問題がないことによって、誰でも着ることができるユニバーサルな構造になっているわけです。とはいえ今のライフスタイルだと、毎日着るのは難しかったりもするので、着物のフィロソフィーを受け継いだ新しい服のあり方を常に模索しています。

未来のことを考えようとする和最先端の技術に意識がいきがちですが、先人たちが編み出したアイデアはとてつもなくエポックメイキングだったりするので、過去にもヒントはたくさんあります。そのまま取り入れられないとしても、フィロソフィーを抽出して現代のライフスタイルに合ったデザインにすることはできるはず。過去と現在と未来をつなげていくのも、デザイナーの仕事だと思っています。

オンライン越しに思いを受け止め形にするオーダーメイド。

もともと、一点物の服を多くの人に届けていきたい思いがありましたが、さまざまな研究や開発をしていた最中に新型コロナウイルスの影響で、チームでものづくりをすることが難しくなり、アトリエの機能も止まってしまいました。そんな中ミュージシャンの方などが、自宅から動画サイトで音楽を配信しているのを見て、ファッションデザイナーも何かできるのでは、と思ったのです。そこで立ち上げたのが、手持ちの白シャツを仕立て直す「Face to Face」というオーダーメイドプロジェクトでした。当初はもう少し先の未来で実現させようと思っていたアイデアだったので、まだ荒削りな部分もあったのですが、気持ちが沈みがちな状況で少しでもファッションの楽しさを届けられたら、とスタートさせました。



Face to Face

「ファッションを通して少しでも気持ちをポジティブに」という中里さんの思いから、緊急事態宣言下の5月1日にローンチされた、チャリティのオーダーメイドサービス。オンライン上で注文客と対話をし、その後預かった白シャツを世界で一着の衣服として仕立て直した。
YUIMA NAKAZATO Co., Ltd.

どういうリアクションが来るか、予測がつかなかったのですが、国内外からたくさん注文をいただきました。本当であれば全員におつくりしたかったのですが、抽選で25名の方に絞らせてもらい、オンライン越しに1対1で対話をして、自身の服に対するこだわりや思い出などを語っていただきました。こちらからも、より相手を知るために、「コロナが落ち着いたたらどこに行きたいですか?」「普段はどんな服装をしていますか?」など、いくつか質問をさせていただきました。仮にタンスに眠っていた服だとしてもさまざまな思い出があって、買った時の値段では測れない価値が詰まっているんです。なので、とても大切なものをお預かりするのだ、という責任を感じました。

通常のオーダーメイドは直接お会いして採寸するプロセスがありますが、今回はオンライン越しに思いをお聞きしたり、仕立て直す前のシャツを着ている姿を拝見したりして、手を加えていくというプロセスを踏みました。ひとりひとりと向き合ってデザインを考えるのは、エネルギーがいることですし、非効率的ともいえます。それでもこの取り組みを通して、服を長く大事に着るきっかけになれば、と思ったのです。中には、このプロジェクトを機に新しく生まれ変わりたいとおっしゃる方もいて、本当にさまざまな思いで申し込んでくださったのがありがたく、自分にとっても、とてもいい経験になりました。

衣服の周辺にある体験を届けることが、デザイナーの役割に。

今はセンスを磨こうと思ったら、インターネットにアクセスしさえすれば、瞬時にそれなりの情報を集めることができます。だからこそ差をつけにくくなっているんです。これからファッションデザイナーの仕事は、よりサービス業に近くなっていくのではないのでしょうか。衣服は変わらず軸ではあるのですが、衣服の周辺にある体験を届けることへとシフトしていく。そういう意味でファッションショーのようなイベントは、体験の場として今後なくならないと思っています。ただしこれからは、プロフェッショナルの人たちに限定された場から、消費者の方にもより開かれたものになっていくのかもしれない。

コロナ以前、ファッション業界全体のスピード感はどんどん速くなり、アウトプットの回数も増えて、短期間で効率よくつくることが求められてきました。その流れを見直して、ひとつひとつのコンテンツにさらに時間やエネルギーをかけて質を上げていく動きは、クリエイティブにとってはとてもよいと思います。やはり短期間でいいものをつくろうとすると、ゼロから生み出すというより、すでにある何かを組み合わせで新しいものとして見せていくようなことしかできないんですよ。素材から開発していくような根本から見直すものづくりは、短期間では絶対にできません。その点、建築やプロダクトデザインなど、年単位の開発時間を設けている他分野のものづくりに、羨ましさを感じたりもしていたのですが、コロナをきっかけに、ファッションも時間をかけて、より質を重視したものづくりをするようになっていくことを期待しています。

オートクチュールは車で例えるなら F1 レースのようなもので、最高の技術で今考えられるもっとも美しいものを発表する場といえます。デザイナーの腕の見せどころとしても大切ですが、デザイナーと顧客が対話をして服が生まれていくプロセス自体も理想的だと思っています。なのでオートクチュールのフィロソフィーを持った新しいサービスやプロダクトが、今後増えていく可能性にも注目しています。服づくりはどこか一カ所をアップデートしても大きな変化にはならないので、総合的なアップデートが必要になります。その橋渡しがデザイナーの役目であり、分業になっているそれぞれをつなげていくことができればいいと思っています。

中里唯馬 ファッションデザイナー

YUIMA NAKAZATO / Fashion Designer



published_2020.07.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

江戸時代の都市における衣服の理想的なあり方。

「21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 3」では、2018 年に、エキシビション「HARMONIZE」をやらせていただきました。その時も未来の服についてさまざまな提案を投げかけました。場所柄もあって感度の高い方々がたくさん来てくださって、「こういう未来の服があったら面白い」とか「こういう服を着てみたい」という意見交換がなされて、とても有意義な機会でした。もうひとつ印象的だったのは、三宅一生さんが足を運んでくださったことです。三宅さんはオートクチュールからプレタポルテに移行する 60 年代、70 年代を振り返り、時代とともにプレタポルテをつくっていったご自身の経験を語ってくださいました。そして「もしかしたらプレタポルテは次の段階に移行していくのかもしれないね」ともおっしゃっていただいて、その言葉にとっても勇気づけられました。



YUIMA NAKAZATO Exhibition - HARMONIZE

2018 年2月に「21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 3」で開催された、中里さんのエキシビション。同年 1 月にパリ・オートクチュール・ファッションウィークで発表した最新コレクションと、その生産システム、東レの環境配慮型人工皮革「Ultrasuede®PX」を使用したプロダクトなどが紹介された。

主催：東レ株式会社

写真：Yasuyuki Emori



21_21 DESIGN SIGHT

東京ミッドタウン内に併設されたデザインの展示施設。デザインへの理解と関心を育てる場として、定期的に展覧会などを行っている。現在ギャラリー1&2では、Takram 田川欣哉が展覧会ディレクターを務める「展 めったに見られないデザイナー達の原画」(～2020 年 9 月 22 日)を開催中。

街を舞台にやってみたいとずっと思っているプロジェクトがあります。都市開発の観点から街づくりについて考える時、交通や建築、インフラなどに注目するのは当然ですが、衣服やファッションデザイナーの役割にまで目を向ける人はおそらく少ない。その点、江戸時代に注目してみると、都市の中で衣服が高いレベルで循環されているんです。具体的には、生地を売っている反物屋がいて、それを仕立てる着物屋がいて、リペアするために回収する人や解体する人もいます。さらに着物は着られなくなったら最終的には雑巾にして、燃やして灰を肥料にするところまで使い切っていました。リサーチしていく中での想像も含めてなのですが、いつでも誰でもそういったサービスを受けることができ、着物と都市のあり方が連動していたのではないかと思います。

現代においても、都市開発とともに衣服の循環を構築できないだろうか、と考えています。もちろん今も生地屋やお直し屋などがありますが、服を手づくりする人が限られていることもありその数は非常に少ない。しかも衣服のリサイクルは、ボタンやファスナーなどさまざまな素材が使われているので、紙と比較するとコストとエネルギーがかかって難しいといわれています。つくる人や直す人、リサイクルする人などが、すべてバラバラになっているのも要因のひとつだと思っていて、それらを全体的に設計することができたら、効率よく循環していくと思います。規模の大きな話ではありますが、ファッションデザイナーの視点も都市構想に加わっていけば、もっと面白いことができるはずです。

取材を終えて

オートクチュールをより多くの人に届ける。一見、矛盾した服のあり方のように思えますが、研究者のような探究心を持つ中里さんのお話を聞いていると、決して夢物語ではない気がして、誰もが一点物の服を着ている未来を想像してワクワクします。そして心躍るこの感覚こそ、ファッションにはとても大切な要素なのだとあらためて感じました。衣食住のひとつを構成する「衣」が、都市にもっとコミットすべきだという意見にも大いに共感。ファッションが街をもっと楽しくしてくれる未来がもうそこまで来ているのかもしれない。(text_ikuko hyodo)

(撮影協力:21_21 DESIGN SIGHT)